ネットがつなぐ地域のきずな

「別子銅山」題材に　高校が地域交流の拠点に

愛媛県立新居浜南高校の取り組み

双方向交流をネットで

愛媛県立新居浜南高等学校（宇和上正校長・生徒数四百十一人）では平成八年度に普通科に替わり総合学科を設置。国際教養、情報、福祉サービスなど六つの系列で特色ある教育活動を展開している。

このうち情報系列では商業系と工業系の科目を設定し、前者では簿記やワープロなど情報処理的な内容を、後者は電気、電子、プログラミングといった情報系列の工業系を担当する河野義知教諭。

河野義知教諭の指導を受けながら、楽しそうに作業を進める情報科学部の生徒達

河野義知教諭

郷土をテーマに新科目も

別子銅山をテーマにした新科目はその後もにぎわいを見せており、現在は別子銅山の産業遺産や八十八カ所ドックアップし、ガイドブックにまとめるという作業が進んでいる。

ガイドブックは一枚ずつ独立して使える構成になっており、表面には銅山最盛期の豊富な記録写真や現在の様子、遺産の概要を手短にまとめた解説文などを掲載。裏面は、ガイドブックを手に現地を訪れた人が気づいたことや疑問点を書き込める。

情報科学部での作業は、歴史の得意な生徒は調査活動や資料収集、Ｗｅｂデザインに興味のある生徒はサイトやガイドブックのレイアウト作業を行うなど、生徒一人ひとりの得意分野を生かす役割分担で進めている。

なかには、当時の建物を分の生き方や考え方を見つめ直すきっかけになります。また別子銅山と新居浜の歴史を学ぶことで、生徒たちは自分なりの関わり方で作品づくりを進めてくれます。問題は題材への興味・関心をどうするかで、そのきっかけを与えるのが師の役割だと思っています」と教諭。

情報科学部では毎年、銅山跡地を巡る登山活動を行っており、こうした体験をベースに興味を高めているという。

またその後の活動については教諭は「一度に多くの情報を与えすぎたり、教師が作品づくりを焦ってしまうと良くない。長いスパンで生徒たちの活動を見守ってあげることが大切です」と語る。

銅山を題材にした地域学習に、情報科学部だけでなく学校全体で取り組もうという動きもある。

「まち学習と情報発信」、「あかがねの道」と題した教育活動を提案中です。銅山の歴史を学び興味を持ったテーマ別に調査とまとめを行い、学習成果をＷｅｂ上で発信するという内容で、二、三年生の共同学習で実施したいと考えています」と教諭。

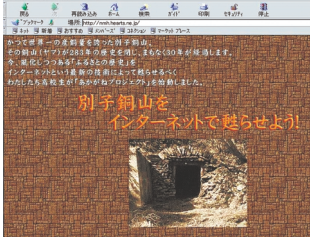
また、海外からのアクセスに対応するためガイドブックの英語版制作も検討しているほか、情報科学部が制作したサイトを地域ポータルサイトにリンクし、地域を学ぶための e－ラーニング教材化する計画など、活動は多方面に広がりつつある。

こうした地域に根ざした教育活動のあり方について河野教諭は、「このような素材はどの地域にもあるはず。教育資源として活用を考えると、その可能性をどう掘り起こし、人とのつながりをいかにして築いていくかがポイントになる」とし、その点でネットワークの活用は有効だと語る。

「学校と地域に人と情報の双方向のつながりが生まれ、そこから新たな活動が広がっていきます。地域の人々が生徒の取り組みを支えてくれるというメリットもあります し、Ｗｅｂ上で情報発信し多くの人から評価されることは生徒のモチベーションの向上にもつながります」

なお本文で紹介したガイドブックの一部は同校ホームページ上ですでに公開中。今年いっぱいをめどに八十八カ所分を完成させ、これまでに蓄積したコンテンツも含めサイト全体をリニューアルする計画だという。

■愛媛県立新居浜南高校 http://www.niihamanami-hi.ed.jp



他者からの評価が生徒の原動力に

自分たちでまとめてネット制作したサイトは広く注目を集めた。この活動は「第六回マイタウンマップ・コンクール」（主催財団）で日本放送協会会長賞を受賞している。

「サイトの制作が地域との連携のきっかけとなり、かつて銅山に携わった多くの方々が生徒たちの活動を支援してくれるようになりました。こうした双方向の結びつきはインターネットがなければ考えられなかったこと」と河野教諭は言う。

教諭が着目した題材は、新居浜市ともなじみ深い別子銅山。情報科学部の生徒を中心に当時の資料収集や現地調査、関係者からの聞き取りなどを行い、その成果をホームページ上で公開した。

「情報科学部では学校ホームページの制作を行っていますが、運用を続けるうちに、校内の情報だけでなく地域の情報も継続的に行っている。

こうしたインターネットを使った情報発信活動は、河野教諭を始め情報科の先生方や学部で平成十一年から続く「別子銅山」に関する取り組みがある。

「インターネット上で見られる別子銅山関連の情報をＨＰ内で公開した。

インターネット上で見られる別子銅山関連の情報がなかったことや、折角調べた成果を見直す動きが全国で広がっていたことなどもあり、制作したサイトは広く注目を集めた。この活動は「第六回マイタウンマップ・コンクール」（主催財団）で日本放送協会会長賞を受賞している。

「サイトの制作が地域との連携のきっかけとなり、かつて銅山に携わった多くの方々が生徒たちの活動を支援してくれるようになりました。こうした双方向の結びつきはインターネットがなければ考えられなかったこと」と河野教諭は言う。

兵庫県教委

産官学民連携でＩＴ教育を推進

ひょうごｅ－スクール

兵庫県は、県内の学校教育の場を提供したい」と語る。

「教育情報ネットワーク」の運用を開始している。また同七年度末までに県立学校のすべての普通教室にパソコンシステムの先行実施や、教育研修などを連携して進めることに合意した。

教育関係者、メーカーなど、企業との事業連携も「ひょうごｅ－スクール構想の重要な柱の一つだった。平成十六年度は、マイクロソフト社と連携した企業と提携し、ＩＴ活用の先進的な教育システムを現場ベースで試していきたい」と意欲を見せる。

教員研修については、ＩＴ活用授業や実際の公開授業を実施する予定だ。一部の進歩的な教員だけではなく、県内の教員全体のＩＴ活用度を引き上げる狙いだ。

上谷係長は「今後のさまざまな領域のコラボレーションにも、県教委と同社の教育システムはしていきたい」と、同社との連携に期待している。

ノウハウ生かし　多角的な取り組み

兵庫県教委と民間企業などでつくる「ひょうごｅ－スクール構想推進協議会」による官民共性を持った教育情報網の創造を目的に、産官学民連携による「ひょうごｅ－スクール」を展開している。その経緯を兵庫県教育委員会事務局の情報教育係長・上谷良一氏に聞いた。

◇

産官学民という幅広い連携を目指した「ひょうごｅ－スクール」。その目的について上谷係長は、「今後の情報社会を担う人材育成の重要課題。ＩＴを活用すれば遠隔授業や自宅学習なども可能になる。子供達が必要なときいつでも情報を取り出せる、新たな教育の場を提供したい」と語る。

もともと兵庫では県政レベルで「ひょうごＩＴ新戦略」を掲げ、ＩＴでの普通教室にパソコンを作成できる。上谷係長は「従来、購入した教材が現場に合わず、無駄になるケースがあった。いろいろと数千万円の教材を購入するよりも、ふさわしい教材を一から開発するのはリスクが大きい。それを考えると、ノウハウを持った企業と提携し、ベース提供を受けて教材開発に取り組むという、今回の手法は非常に効率的」という。

利用者を重点的に進めている。その中で教育は「情報社会の入り口」を担い、「ひょうごｅ－スクール」構想がその柱となっている。

すでに平成十四年度内に県内の全公立校等にインターネット接続を確立。同十五年一月から、全県立学校や教育委員会等を光ファイバーで結ぶという。

利用を重点的に進めている。その中で教育は「情報社会の入り口」を担い、「ひょうごｅ－スクール」構想がその柱となっている。

すでに平成十四年度内に県内の全公立校等にインターネット接続を確立。同十五年一月から、全県立学校や教育委員会等を光ファイバーで結ぶという。

◇

産官学民という幅広い連携を目指した「ひょうごｅ－スクール」。その目的について上谷係長は、「今後の情報社会を担う人材育成の重要課題。ＩＴを活用すれば遠隔授業や自宅学習なども可能になる。子供達が必要なときいつでも情報を取り出せる、新たな教育の場を提供したい」と語る。

もともと兵庫では県政レベルで「ひょうごＩＴ新戦略」を掲げ、ＩＴでの普通教室にパソコンを作成できる。上谷係長は「従来、購入した教材が現場に合わず、無駄になるケースがあった。いろいろと数千万円の教材を購入するよりも、ふさわしい教材を一から開発するのはリスクが大きい。それを考えると、ノウハウを持った企業と提携し、ベース提供を受けて教材開発に取り組むという、今回の手法は非常に効率的」という。

教員研修については、ＩＴ活用授業や実際の公開授業を実施する予定だ。一部の進歩的な教員だけではなく、県内の教員全体のＩＴ活用度を引き上げる狙いだ。

上谷係長は「今後のさまざまな領域のコラボレーションにも、県教委と同社の教育システムはしていきたい」と、同社との連携に期待している。